

18世紀女性衣装の構造

— トワル・ドゥ・ジュイ製ローブのレプリカ製作を通して —

中西 希和*・永野 泉**・三友 晶子***・今村 飛鳥***・小堀 友子****・能澤 慧子*****

The Constructions of Women's Costume in 18th Century

— Through the Making of Replicas of Gowns in *Toile de Jouy* —

Kiwa NAKANISHI, Izumi NAGANO, Shoko MITOMO, Asuka IMAMURA, Yuko KOBORI, Keiko NOHZAWA

はじめに

18世紀モードの華麗さについてはつとに語られるところである。その中でもひとときわ華麗を極めた女性のローブに関しては、全体の雰囲気はもちろんのこと、微細なディテールまで描写した絵画作品やファッション・プレート¹の例が少なくない。しかし、さらに実際の形状や内部の構造、仕立屋や着付け方法の実際については、これらの視覚資料は必ずしも充分には伝えてくれない。

歴史服研究の分野では、かねてより、ファッションの美感と共に、物としての一つ一つの衣服の具体性への関心は高く、そのために歴史服のコレクションも欧米各国で多々形成されてきた。そして近年、そうしたコレクション中の実物資料の裁断・縫製・着装・装飾方法に関する調査研究が長足の進歩を遂げ、多々公刊されるに至っている¹⁾。

本研究は、こうした研究成果をもとに、18世紀フランスの女性用ローブのレプリカを実作し、その過程、及び結果から、視覚資料では得られない当時の衣服に関する多様な情報を得ることを目的としている。

18世紀フランス女性のローブは、ローブ・ヴォラント (robe volante)、ローブ・ア・ラ・フランセーズ (robe à la française)、ローブ・ア・ラ・ポロネーズ (robe à la Polonaise)、ローブ・ア・ラ・シルカシエンヌ (robe à la circassienne)、ローブ・ア・ラ・クレオール (robe à la créole)、カラコ (caraco)、など多様である。いずれもスカート部分をパニエによって大きく膨らませる構造という点では共通しているが、とりわけローブ・ア・ラ・ポロネーズのシルエットは独特である。また一般に西洋の女性の服装はワンピース型であるのに対して、18世紀には腰丈の、ジャケットのような長さの上着カザク (casaque)、カザquin (casaquin) とベチコートを組み合わせたツーピース型のスタイルも、略装ではあるが、登場している。

* 家政学研究科博士後期課程2年 ** 家政学研究科修士課程修了生 *** 家政学研究科修士課程2年

**** 家政学部服飾美術学科平成15年度卒業生 ***** 服飾美術学科

本研究では、この特異なシルエットをもつローブ・ア・ラ・ポロネーズと腰丈のローブ、カザカンに注目し、そのシルエットがいかんにして生み出されたのかを、レプリカ製作を通して把握しようと努めた。また17世紀よりインドからの輸入品としてヨーロッパで人気を集めた更紗の製法を導入して、18世紀半ばにフランスでその生産が始まったトワル・ドゥ・ジュイ²⁾のレプリカも合わせて製作し、当時の衣装の持っていた印象を如実に再現することを試みた。

尚、製作に関する予備的調査研究は本学服飾文化史研究室の能澤の立案による自主研究として上記6名で、衣装のレプリカ製作は小堀が卒業研究の一部として、トワル・ドゥ・ジュイのレプリカ製作と着装や装飾などは中西を中心として永野、三友、今村が共同で行った。

1. ローブ・ア・ラ・ポロネーズのレプリカ製作

(1) ローブの種類とパターン

ローブ・ア・ラ・フランセーズの変形で、ローブのスカートの左右2箇所、やや後よりの位置を、まるで舞台の緞帳のように吊り上げて生み出される独特のシルエットが特徴である。この名称は紐で吊り上げた結果、スカートが3つのふくらみを持った部分に分かれることから、オーストリア、プロイセン、ロシア三国による1772年の第一回ポーランド分割という政治的出来事をなぞられたものである。

このスタイルは元来、何か軽い作業を行ったり、戸外を歩行するような際に、ローブの裾が汚れたり、邪魔になるのを避けるために、しばしば後方にたくし上げた、ごく日常的な習慣から生まれ、やがて一つのスタイルになったものとされる。

歴史衣装の実物に基づいたパターン研究の成果に関する上述の著作の中で、ボームガーテンとワトスン著「コスチューム・クローズアップ」³⁾に取り上げられているポロネーズ型ローブ(アメリカ、ヴァージニア州ウィリアムズバーグ、コロニアル・ウィリアムズバーグ財団所蔵)は、ポロネーズ型発生の初期の面影を思わせる、比較的簡単な方法でスカートをたくし上げている。つまり、ローブのスカート部の裏側左右2箇所にとりつけた紐でスカートを束ねるようにしてたくし上げ、紐の先端のループをスカートの表側につけたボタンにかけて、独特のボリュームを生み出しているのである。筆者等はこの素朴で、かつ独創的なシルエットを構成する手法に特別関心を寄せ、レプリカ製作の対象として選んだ。

同書のこの資料に関する記述の概略は次のとおりである⁴⁾。

①製作年：1770-1780

②材 料：多色の絹ブロード、リネンと絹の裏地、リネンのテープ、絹糸のフリンジ、リネンと絹の縫い糸。

③寸 法：ローブ 着丈162.6cm、後肩幅26cm、スカートの裾回り250.2cm、布幅50.5cm
ペティコート 前丈91.4cm、裾回り275.6cm、ウェスト8.4cm
スタマッカー 長さ37.5cm、巾27.9cm



図1 資料としたローブ・ア・ラ・ポロネーズ



図2 資料としたローブ・ア・ラ・ポロネーズ 側面

④スタイル

このローブは鮮やかなカラフルなブローケード、幅広のフリル、巾の狭いフリル、フリンジなど、この時代最上の特徴を示している。極めて精巧で、豪華な印象を持っている。このローブは低い、角型のネックラインを持ったスタマッカーと共に着用された。ローブのスカートは前を開けた状態で着装し、その内側の共布のペティコートを見せた。後肩から裾に向かってたたまれた襞のあるローブは、イギリスとアメリカでは「サック」と呼ばれた。この優美なスタイルは18世紀の大半の期間を通じて流行したが、最後の四半世紀の間にゆっくりと身体に密着したスタイルへと、そしてさらには古代風へと移行した。この作例は襞を生み出すように引き上げるポロネーズ型のサック・バックの一揃いである。胴部の内側の裏地には「Mary Nibst」と赤で粗く刺繍されている。この名前は19世紀以後のものであり、おそらくこのローブを引き継いだ後の所有者のものであろう。

⑤材料

ローブ：太敵織縞模様地に花模様ブローケード絹地。絹糸ループ状フリンジ縁取りつきの共布襷飾り。縫い糸は絹糸。補修縫糸は未染リネン糸。裏地は2種類の平織りリネン。ローブの前端胸部に5個のフック。(対応する左側にフックを受けるはずのループは無い。フックは19世紀の補修と考えられる。)

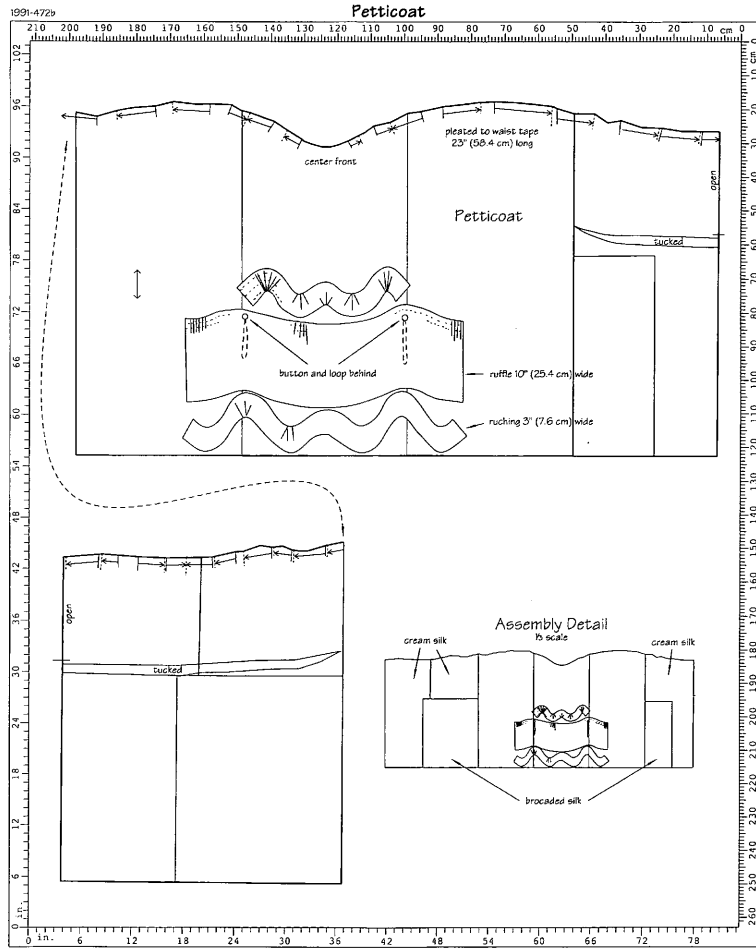


図3 資料としたローブ・ア・ラ・ポロネーズ パターン

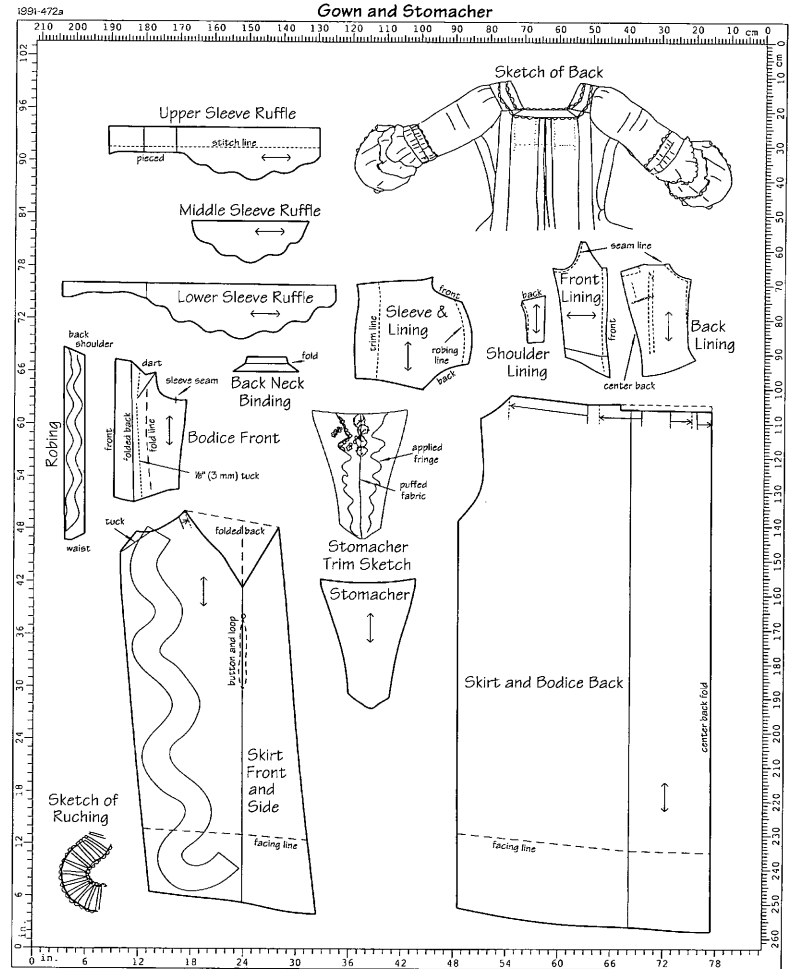


図4 資料としたローブ・ア・ラ・ポロネーズ パターン ペティコート部分

ペティコート：リネンで裏打ちした畝織絹地で構成。

スタマッカー：花柄地模様にも多色の花、葎、葉を織り出したブローケード製。絹糸のフリンジと布を膨らませた装飾。

⑥補修、仕立て直し

ローブにはほとんど仕立て直しは見られない。色は鮮やかで、退色は見られない。スカートの裏布の損傷は大きい。ペティコートの後は着用時には見えないが、平織り絹地で修復されており、裏地はやや後代のものと思われる。ウェストにはサイズを小さくした跡があり、ウェストの綾織のベルトは取り替えられている。スタマッカーはローブやペティコートとは生地が異なり、他のローブ用の品として、ないしは後代に古い生地で作られたと推測される。

(2) レプリカ製作

①材料

上記の畝織地花模様ブローケード織絹地を一般の市場から見出すことは、相当困難であるため、本研究においては便宜的に18世紀のフランス製更紗（トワル・ドゥ・ジュイ）に似た綿プリント地を用いることにした。生地は未晒しの平織りの地に赤一色で、銅版プリント風の模様が印刷されている。

裏地は「リネンと絹の裏地」とあるが、薄手のリネンが入手できなかったため、リネンに風合いの似た未晒し平織り木綿を用いた。

資料の縫糸は絹とリネンであるが、レプリカでは生地が木綿のため、丈夫さを期して、ポリエステルを採用した。

②裁断

同じくボームガートンとワトスン著『コスチューム・クローズアップ』に掲載されている同ローブの縮小のパターンを用いることとする。等身大ではなく、ハーフサイズでの製作をおこなうこととし、記載されている寸法の二分の一になるように、拡大コピー機で調整した。

ハーフサイズに整えたパターンを、まずシーチングで裁断して全体を縫製し、ハーフサイズ（9号サイズ）の人台に着装させた。しかし胸部と袖付け周りが極めて窮屈で入らなかったため、補正し、全体で丈と幅を2割増しに調整して再び試みた結果、ようやく着装させることができた。

このことは、この衣装が現代女性の標準的サイズよりも20%も細身の人物によって着用されていたことを意味する。おそらくコルセットにより、胸部全体をしっかりと締めていたものと想像されるが、腕付け根周り、首回りも同様に20%ほど細く、これは人工的ではなく、本来のものと思われる。

③縫製

同書の説明に従い、すべて手縫いで行った。

同資料に用いられている縫い目はランニング・ステッチ（並縫い）、バックステッチ（返し

縫い)、ホイップ・ステッチ(裁ち目かがり)、スランティッド・ヘミング・ステッチ(まつり縫い)である。

たとえばスカートの縫い目はランニング・ステッチであり、2.5cm当り5ないしは6目とあり、1cm当りでは2ないしは2.4目、つまり1目の長さが5mmないしは約4mmということになる。バックステッチは部分的な補強用に用いている。

縫製はローブ、ペティコート、スタマッカー、装飾の順序で行った。

a. ローブ

胸部の裏——胸部前身ごろのダーツとタック——後身頃(胸部とスカート部が連続している)——後身頃と胸部前身ごろの肩と脇の縫い合わせ——スカート前部分の結合——胸部の裏の取り付け——袖作りと袖付け——袖口飾り——裾

「背面のプリーツは非常に深く、ネックラインから4インチ(10.2cm)下まで、目の粗い縦方向の並縫いと横方向の千鳥縫いで固定された」⁵⁾とあり、これは畳んだプリーツの陰ひだを、プリーツが無く、身体にぴったりと合った裏地に縫い付けることを指している。

後ろ襟ぐりの始末には表布と共布の見返しを使い、その端は畳み込んで、裏地にまつり縫いで伏せ止めている。

スカートの前端は並縫いで始末されているとある。裾の始末については18.4cmから22.9cmの幅のクリーム色絹地で裏打ちがなされており、おそらくポロネーズ上に吊り上げた際に裏側が人目に触れることを想定したためであろうとしている。レプリカでは裾からスカート丈の途中までの裏を付けると、表側から透けて見えてしまうので、この工程を省略し、裾の始末はペティコートと同様に6mm弱幅の三つ折にして3重になった上から並縫いで仕上げた。ポロネーズの構成のためのボタンは資料では直径1.6cmであり、レプリカではその約半分の直径1cmのものを用いた。このボタンをスカートの左右の指定の位置につけ、その裏側に細紐を取り付け、この紐でスカートをたくりあげて、紐の先端のループにボタンをかけるのである。

b. ペティコート

5枚の布をはぎ合わせて輪にし、ウエストのタック、後ろ部分のタックを縫い、ウエストバンドを取り付けた。開きは着付ける際に縫い合わせるため、特にフックなどは付けなかった。

裾の始末については「6mm折り返して、並縫い」⁶⁾とあるので、レプリカでも同様に行った。縫い目は並縫いを用いた。

c. スタマッカー

裏は資料にならいつけなかった。端は資料の場合同様にすべて裏側に三つ折して、並縫いで始末した。資料のスタマッカーには「ローブに取り付けるためのフックは無く、周辺に見られる小さな穴から、ピンで留めつけていた」⁷⁾と推測されているので、レプリカでも同様の方法を採用することにした。

図5 ロープ・ア・ラ・ポロネーズのレプリカ 前面



図6 ロープ・ア・ラ・ポロネーズのレプリカ 背面



図7 ロープ・ア・ラ・ポロネーズのレプリカ 側面



図8 ロープ・ア・ラ・ポロネーズのレプリカ スカートの部分



図9 ロープ・ア・ラ・ポロネーズのレプリカ 袖口部分



d. 装飾

資料ではローブの身頃とスカートの前面、袖口、ベティコートの裾部分に共布のフリルを飾っている。レプリカでは木綿製であり、木綿製の場合は一般に簡素なデザインが多かったことから、袖口のフリルのみを資料に従うことにした。袖口の装飾が無いと袖丈が短くなり、装飾というよりも、当時のドレスの構造をなしてあり、省略できないからである。

また当時の着装では、袖口の装飾の縁、ローブの襟ぐり部分にレースを付けるのが一般的であった。そこで当時のアランソン・レース、マリーヌなどの地の部分の多い、薄く軽い印象を持った市販のチュールレースを加えた。

④着装

18世紀にはローブはほとんどがパニエと共に着装された。レプリカでは今回はパニエ製作まではできなかったため、パッキング材を用いてパニエ状の膨らみを構成した。

その上からベティコート、ローブ、スタマッカーの順に着装させた。スカート裏につけた紐を表に回してスカートをたくし上げ、ボタンを掛けると、ポロネーズの膨らみはごく簡単に生まれた。

スタマッカーは予定通りにピンでローブに留めつけたが、柔らかくて、18世紀の絵画に見られるような胴部の固い印象が生まれなかった。当時のこうした印象はコルセットを用いて、バスタの頂点からウェストにかけて、シャープなコーン型を形成していたためである。そこで便宜的にスタマッカーの裏側にやや厚紙の芯をつけて、効果を近づけた。

結果は図に示した。

2. トワル・ドゥ・ジュイとカザカンのレプリカ製作

(1) トワル・ドゥ・ジュイのレプリカの製作

1. のローブ・ア・ラ・フランセーズのレプリカには、トワル・ドゥ・ジュイ風のプリント生地を用いた。18世紀に生産され、実際に用いられた生地に近い生地が得られれば、一層レプリカの復元性が高くなる。そこで、インクジェット捺染機を使用して18世紀にフランスで流行したトワル・ドゥ・ジュイのレプリカを製作し、これを用いて18世紀の衣装のレプリカを製作した。絹織物のレプリカ製作には多大な困難があるが、トワル・ドゥ・ジュイは現代プリント技法の元祖であり、比較的模倣しやすいと考えたからである。

資料として用いたのは、フランス、ジュイのオーベルカンフ博物館所蔵の1782年ごろに製作された生地である（所蔵品番号938.7.）。様式化された花と伝説上の怪獣をモチーフとしたエキゾチックで鮮やかな模様である。版は木版で、リピートは19.5cm×26.5cm、7色使いである。ジョゼット・ブレディフ著『フランスの更紗』⁸⁾に掲載されている図版を基とし、半身大の衣装製作のために、縦横共に原寸の半分の大きさに縮小してプリントした。

以下にインクジェット捺染機による更紗レプリカ製作の過程を示す。

①使用機器：Textile Jet Tx-1600S（株式会社ミマキエンジニアリング製）、スキャナ

②用 布：インクジェット用前処理を施した布（綿）

③イ ン ク：反応染料インク

④使用ソフト：Adobe photoshop7.0、Tx-Link Print

⑤方 法：

「スキャナで画像を取り込む」 → 「画像を加工する」 → 「プリントする」 → 「後処理」

⑥調 整

a. 解像度

初めにスキャナで画像を取り込む時、解像度を200dpiに設定して取り込んでいたが、実際にプリントし、蒸してみると、滲んでしまった。次に解像度を600dpiに上げて画像を取り込んでみた。紙に印刷すると200dpiの時よりはきれいだったが、布へのプリントではまだ大分滲みがあった。

b. ファイル形式

これまでは画像のファイル形式をJPEGに設定して保存していた。しかし、JPEGは画像の圧縮率が高く、画質が劣化してしまうため、プリントした時に滲んだ様になってしまう原因と考えた。そこで非圧縮のBMPで保存することにした。

c. 画像の加工

今回使用した画像は18世紀の布であり、製作されてからかなりの年数が経ったものであった。そのため、色が変わってむらになっている部分や手作業のためにリピートがずれている部分があった。また、拡大された写真を使用したため、布の織目が見えてしまっている部分などもあった。むらになっている部分や布の織目は、画像の加工処理することなくそのままの画像を使用してプリントすると、目立ってしまい、汚く見えてしまう。リピートがずれている部分もそのままでは不自然なデザインになってしまう。そこで、Adobe Photoshop7.0を使って画像の加工を行った。行ったのは、布の地の色を塗り直す作業である。その過程を下記に示す。

ア) Adobe Photoshop7.0を起動し、画像ファイルを開く。

メニュー：《ファイル》→《開く》→ファイルの場所を指定してファイルを開く。

イ) 色を変えたい場所を範囲指定する。

メニューの《選択範囲》をクリックし、《色域指定》を選ぶ。《色域指定》ダイアログボックスが表示されたら、《選択》で《指定色域》を選択し、《画像の表示》にチェックをつけ、《スポイト》で選びたい色域をクリックして選択する。《許容量》は画像によって最適な数値が変わってくると思われるので、適宜調節する。設定が終わったら《OK》をクリックする。

ウ) イ) で選んだ色域が破線で選択されるので、その部分の色を変える。

《描画色の設定》から変えたい色を選択して描画色を変更する。または《スポイトツ-

ル》から画像の中から変えたい色を選択して描画色を変更することも出来る。

- エ) メニューの《編集》から《塗りつぶし》を選ぶと色が変わる。変更出来たら《名前をつけて保存》する。《塗りつぶし》をやり直す場合は、続けて《塗りつぶし》をすると色や形の境界がぼやけてしまうので、《編集》から1段階（色域が破線で選択されている状態まで）戻って色を選択し直す。全体的に明度や彩度を変える場合には《イメージ》→《色調補正》→《色相・彩度》を選び、明度、彩度を調節する。
- オ) リピートのずれを目立たなくするために絵柄の一部に、《スポイトツール》選んだ色を、《ブラシツール》などを使って塗りつぶす。

d. 出力設定

画像を加工し、保存した後、ソフトTx-Link Printを使ってプリントの設定を行うが、この時、720dpi-Fastに設定されている出力設定を720dpi-Fineに変更する。b. とこの出力設定を行うことによって、滲んだ様になることなく、はっきりとプリント出来るようになった。

以上のような試行の結果、以下に示す方法に決定して実行したところ、ある程度満足の行く結果を得た。

- ① スキャナで画像を取り込む。解像度は600dpiに設定する。
- ② 画像を保存する。(ファイル形式はBMP)
- ③ Adobe Photoshopで上記c、ア)～オ)の加工を施して保存する。
- ④③で保存したファイルをTx-Link Printで開く。
- ⑤ 《ジョブ設定》から《レイアウト》で、《画像サイズ》、《ステップ設定》を設定する。
- ⑥ 布をセットする。布は中表になっているので、中側を印刷面にセットする。
- ⑦ Textile Jet Tx-1600Sの電源を入れ、《REMOTE》キーを押して「ローカル」にし、矢印キー(◀▶)を使ってプリントを始める布の位置を決める。決まったら《REMOTE》キーを押して「リモート」にする。
- ⑧ パソコンの画面に戻り、《出力サイズ》を《読み込み》をクリックしてメディア幅を読み込む。幅と長さを設定する。
- ⑨ 《出力設定》のタブをクリックし、《出力設定》を「720dpi-Fine」を選択し、プリントを始める。
- ⑩ プリントが出来たらドライヤー(冷風)で乾かし、不織布、新聞紙に巻いて12分蒸す。
- ⑪ 流し台に、水を約5cmの深さ(約78ℓ)まで入れ、白湯汚染防止洗浄剤(タナクリン)を水の2%入れ、10分間洗う。
- ⑫ 大鍋で60℃の湯の中で10分間混ぜる。
- ⑬ 粗熱を取り、大鍋に水約25ℓと色止め剤(タナフィックス)を水の2%入れ、10分間浸ける。
- ⑭ 水洗いし、タオルに巻いて、2分間脱水機で脱水する。

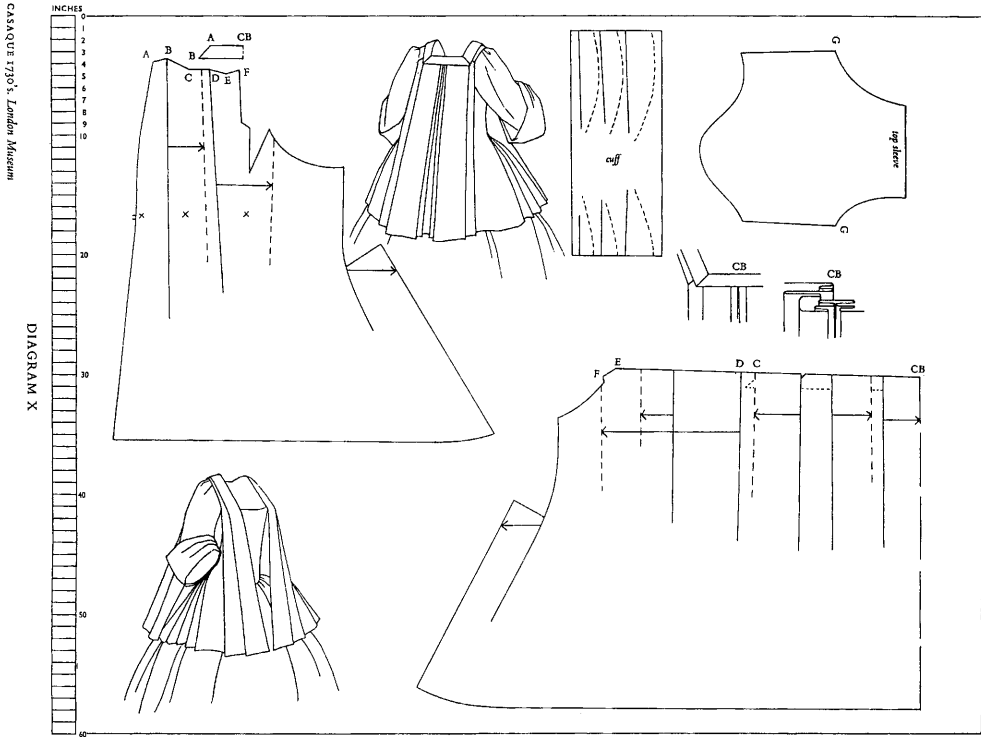


図11 カザカンのレプリカ製作の参考としたパターン

⑮乾燥させ、アイロンをかける。

(2) カザカンの製作

上述のようにツーピース型の服装に関心を寄せ、カザカンと共布のペティコート、スタマッカーを製作した。そこで資料として選んだのはノラ・ウォー著『婦人服の裁断 1600-1930』⁹⁾に掲載されている、「casaque」である。

ルロワールの服飾辞典ではカサック (casaque) については17世紀の騎士の鎧の上に重ねる上着、ないしはそこから発生した男性用の上着の類として説明しており、他方カザカン (casaquin) は18世紀の背中襷をたたんだローブを腰の付近までの長さに短縮した衣服としている。また18世紀後期にはこの背中中のプリーツがぴったりと身体に沿うように縫い抑えられたものとなり、カラコ (caraco) という呼称が生まれたとしている¹⁰⁾。それに対してウォーは『婦人服の裁断 1600-1930』の中で、ルロワールのカザカンの説明に相当する衣服の説明図に、「カサック casaque」という語をつけている。英語圏での述語の使い方を明らかにすべく、カニングトンの『英国服飾辞典』¹¹⁾を紐解くと、そこにはカザカンは項目には無く、カサックの項目には、カラコのような説明がついている。仏語ではカサック、カザカン、カラコと多彩な服飾用語が生まれたのに対して、英語では一つの語が多様な意味を含んでいると言えよう。ここでは厳密性を期して、仏語のカザカンと呼ぶことにする。



図10 トワル・ドゥ・ジュイの資料



図12 カザカン一式のレプリカ 前面



図13 カザカンのレプリカ 背面



図14 カザカンのレプリカ 前面部分

裁断はウォーの著作に掲載されているパターンを前回と同じく1.2倍に調整して用いた。ベティコートとスタマッカーのパターンは紹介されていないので、ローブ・ア・ラ・ポロネーズと同様とした。

縫製順序、方法、着装もすべてローブ・ア・ラ・ポロネーズと同様に行った。

3. まとめ

フランス製銅版の更紗に良く似た市販の綿プリント地を用いて、ローブ・ア・ラ・ポロネーズ一式の半身大レプリカを製作し、人台に着装した。続いて、18世紀の木版トワル・ドゥ・ジュイのレプリカを製作し、それを用いてカザカン一式のレプリカを製作した。これらの製作過程、及び着装を経て得た認識は次の通りである。

(1) 縫製にかかる時間

2つのレプリカのどちらも、110cm幅の生地で3.5m使用した。これを裁断し、縫い合わせる作業には多大な時間を要した。また襷をたたんで3重に重なった部分を別布に縫い合わせる際には4枚以上を針で貫くこともあり、相当な力も要した。今回は半身大であり、等身大の場合はこれの4倍以上の縫い目を必要とする。またフリルの多くを省いたが、これも資料どおりに行えば、一層の労力がかかることは当然である。手縫いの仕事にかかる労力の大きさを痛感した。

(2) ステッチ

並縫いの箇所が非常に多いことに気付いた。現代ではまつり縫いにするような部分も、三つ折にして、3枚を重ねた状態で並縫いする。おそらく丈夫さを期してのことと推測される。補強のためには、部分的に返し縫いも加えている。

(3) ポロネーズのシルエット

極めて素朴で単純な方法でのポロネーズのシルエットの作り方を再現したが、紐を裏から回してたくし上げるだけで、絹織物を用いた資料と同一とは行かないが、ほぼこれに近い独特のシルエットを実現することができた。

(4) トワル・ドゥ・ジュイ

トワル・ドゥ・ジュイの資料をスキャナで読み取ることにより、色むらやリピートのずれがあることに気付いた。手仕事で製作していたことを実感した。

またトワル・ドゥ・ジュイのレプリカで製作したカザカンは市販のプリント地で仕立てたローブ・ア・ラ・ポロネーズよりもはるかに鮮やかで、生き生きとした印象を持っている。絹織物の艶やかさ、豪華さには欠けるが、親しみやすく、愛らしい。このトワル・ドゥ・ジュイを好

んだ18世紀ヨーロッパにおける趣味性を実感した。

おわりに

今後さらに当時の衣装の持つ感性に近づき、衣装製作の仕事の実態についての詳細な知識を得るためには、今回のレプリカ製作では省略した装飾を加えること、コルセット、パニエなどのファウンデーションのレプリカ製作や絹織物を用いた製作を試みる必要があることを痛感した。

最後に、トワル・ドゥ・ジュイのレプリカ製作に関してインクジェット捺染機の使用をお認め下さり、ご協力下さいました前本学服飾美術学科教授小笠原眞次先生、本学助手長嶋直子先生、また染色品の仕上げについて御指導下さいました染色家・本学非常勤講師須藤智子先生に、深く感謝申し上げます。

註

- 1) Waugh, Norah :The cut of women's clothes 1600-1930. London, Faber & Faber, 1968.
Bradfield, Nancy :Costume in detail; women's dress 1730-1930. London, George G.Harrap, 1968.
Arnold, Janet :Patterns of fashion; English women's dress & their construction, Vol.1, 2, 3, London, Macmillan, 1964-1985.
Baumgarten, Lida & Watson, John :Costume close-up, Clothing construction and pattern 1750-1790. Williamsburg, The Colonial Williamsburg Foundation, 1999.
Burnston, Sharon Anne :Fitting & proper, 18century clothing from the collection of the Chester County Historical Society. Texarkana, Scurlock, 1998.
Hart, Avril & North, Susan :Fashion in detail from the 17th and 18th centuries. New York, Rizzoli, 1998.
Crill, Rosemary, Wearden, Jennifer & Wilson, Verity :Dress in detail from around the world. London, Victoria & Albert Publication, 2002.
- 2) トワル・ドゥ・ジュイ toile de Jouy :インドに起源を持つ木版プリントを施した綿布(日本語の更紗)を模倣して、フランスのジュイ・アン・ジョサにおいてオーベルカンフ一族が創設した工場で生産された捺染の綿布の総称。
- 3) Baumgarten, Lida & Watson, John :Costume close-up, Clothing construction and pattern 1750-1790. Williamsburg, The Colonial Williamsburg Foundation, 1999.
- 4) Baumgarten, ibd., p.16.
- 5) Baumgarten, ibd., p.18.
- 6) Baumgarten, ibd., p.22.
- 7) Baumgarten, ibd., p.20.
- 8) ジョセフ・ブレディフ著 深井晃子訳 :フランスの更紗、平凡社、1990年。
- 9) Waugh, Norah, ibd.,
- 10) Leloire, Maurice :Dictionnaire du Costume, Paris, Librairie Gründ, 1951, p.61.
- 11) Cunnington, C.W. & P.E. :A dictionary of English Costume 900-1900, London, Adam & Charles Black, 1960, p.38.